

幼児の造形活動における紙の可能性 (1)

田 中 陽 子

1 序

- 1 序
- 2 造形活動を通しての教育
- 3 造形材料としての紙
 - 3.1 工 作 的 材 料
 - 3.2 紙 の 定 義
 - 3.3 紙 の 種 類
 - 3.4 紙 の 性 質
- 4 紙 の 技 法
 - 4.1 紙 の 加 工 法
 - 4.2 紙 工 作 の 用 具
- 5 紙による材料体験
 - 5.1 紙による立体構成
 - 5.2 紙製品の廃材による製作
- 6 結 語

幼児の造形的表現活動は、絵をかく活動や、物を作る活動や、またその総合されたような活動で行なわれている。

絵を描いたり、物を作ったりする発想から始めて、計画をたて、作成し、生活に生かして価値あるものにしていくといった過程に、重要な人間性の陶冶につながる大きな教育的意義があると思う。

子どものいろいろなものに対する感覚的な経験や、子どもの創造的造形活動が、最近では幼稚園の教育でも重んじられるようになってきたことは喜ばしい。

人間が幼い頃から持っている物を作ったり、描いたり、飾ったりする造形的本能を一番手近に試みることのできる素材として、紙は最も適した材料であるともいえる。しかもその紙は実に多種多様な造形的可能性を持っている。

紙という素材は、我々の日常生活の身近にたいへん豊富に存在し、安価であり、重さも軽く幼児にでも容易に細工したり加工したりすることができる材料である。

また、子どもたちの生活を楽しいものにしてくれる数々の紙製品の玩具が、日本にはたくさんある。例えば、風車、紙たこ、風船、お面、姉さま人形等である。四季の行事に使用される紙製品をあげると正月のたこあげ、三月の桃の節句の人形、五月の端午の節句の紙で作った大きな鯉、七月の七夕祭では数々の紙細工で作品を作り、青い竹を飾るといように年中行事にも数々の日本民族独特の慣習的作品を見ることができる。

この紙という平面的素材を切ったり、折り曲げたり、折たたんだり、組み合わせたりすることにより新しい立体的な作品が形成される。その構成された形体は数学的、力学的な構造にも結びつき、新たに創造された立体から感動を受けることもしばしばある。紙は楽しい立体構成の素材であると感じている。

幼児の造形教育の系統的指導の研究を進めるために、この造形素材としての紙の可能性について明らかにし、本学幼児教育科の学生の指導及び、幼児の造形的表現活動の指導においても役立て、今後さらに実証に基づいた系統的指導を考えていかなければならないと思う。

2 造形活動を通しての教育

今日の造形教育は、「芸術を教える教育」としての造形教育ではなくて造形活動を通して人間形成を図ろうとする「芸術を通しての教育」という考え方が中心となっている。

この考え方は、『芸術を通しての教育』の著者、イギリスのハーバート・リード(H. Read)から出発している。アメリカのローウェンフェルド(V. Lowenfeld)もリードの影響を強く受けた人で、芸術活動を自己表現の活動として重要視している。ドイツのバウハウスの教育も内容的には子どもの興味にもとづく創造的な製作活動が述べられている。

子どもの造形活動の目的は、あくまでひとりひとりの子どもの望ましい(自主的で、創造的で、人間的な)成長にあって、作品をつくることはそのための手段である。しかし工作の面になると、まだまだできあがりクということのみに重点をおいて、その過程の重要性を無視していることに気をつけねばならない。特に幼児の製作活動においては、作業している過程の方ができあがった作品よりも大きな意義をもつということを認識しなければならない。子どもはその子どもとしての働きのもつ自然の過程をふみ、実験と失敗を積み重ねさせてこそ、つぎの過程へと進むことも可能である。

描画活動の発達段階の初期に見られるくねたくりクの精神衛生への結びつきは、もうほとん

どの美術教育家が認めている。しかし、その描画と団体である製作活動の発祥期にも当然存在するク素材のくねくりクとか、材料の実験とか心理表象とかは、ほとんど無視されている。どんな工作にも必ず描画のくねたくりクにあたるもてあそびをする時期があり幼児自身にとっては意味のある活動であることに気をつけたい。

幼児の造形活動は、小手先の器用さによる成人の模倣や自然物の再現の作業としてではなく幼児の全人格的な自己表現の活動として考えなければならないと思う。子どもの真実は、子どもらしい態度で熱中している造形活動のうちに見られる。この点では自然発生的な遊びは最も自主的、自発的、積極的、継続的な子どもの行動であるといえる。

どの幼児にもそれなりの特質や能力があり、その可能性があることを見つけ出し、生きがいをもった活力のあふれた表現活動を導き出すために、具体的な方策をもち、その場面場面で力強く対決していく子どもの生きがいを育てることが何よりもたいせつである。

子どもたちは、手でものを作ることによって自分のものを知る世界を拓げていく。

「わかる」ということで最も確実なものは、自分の手で作ってみることである。自分のイメージを素材というものにたくし、道具というものを使って表現していく活動のことをいっている。

造形的活動の真の価値は、子どもたちが自分の目で、心でとらえた感銘を、どう表現しようかという思考や意図、それを自分の手で、自分の力で具体的に表現するという二面の活動を強く持っていることである。創造的思考と表現の二面が、すべて自分の責任として自覚されるということである。

このものを作ることによって、素材と手段と作ろうとするものの機能の三つの心がわかるということで、確かに工作することによって育てられる重要な点であると考えられる。

もう一つ大事なことがある。それは、「バラバラなものを統合して、一つの秩序あるものにまとめていく」という働きである。現代文明の中でいろいろな過剰情報によって、バラバラな

知識の断片だけが、いつも受動的にとり入れられて、ものごとを総合的にとらえることができなくなったということが指摘されている。「バラバラの異質のものを、自分のアイデアにしたがってまとめ、ひとつの秩序あるものに作っていく。」これが造形であり、このような造形的活動が望ましい子どもの教育を考える時必要だと思う。

3 造形材料としての紙

3.1 工 作 的 材 料

造形活動は材料によって具体的に表現され、造形表現には材料がつきものである。

人類は常に材料を自然から生み出すと共に人の力によって新しい材料を生み出すことにも努力してきた。材料は常に変化し発展を続けており、材料の可能性もまだまだ無限にあるといえる。

造形教育を推進して行くためには材料に対する理解を深めるということは重要な一面である。創造的表現力ということを考える場合にも材料の理解とか、これを処理することが根底になっていなければよりよい表現は望めない。また材料がどのように作り出されたか、どのような特性があるかなどについても関心を持ち、材料のもつ可能性などを生かした造形活動へ発展させたい。

では工作的材料としてはどのようなものがあるだろうか。次のようなものがあげられる。

- a 紙
- b 木 材
- c 金 属
- d 合成樹脂
- e 竹
- f 粘 土
- g そ の 他
- イ 接着材料
- ロ 研磨材料
- ハ 緊結材料
- ニ 塗料材料

ホ 染色材料

- ヘ その他の造形材料（ビーズ、糸、布、きびがら、輪ゴム、テープなど）

工作的材料としてこのようなものが考えられるが、この中で幼児の造形材料として最も身近な「紙」について追求していきたい。

3.2 紙 の 定 義

紙とは英語で paper、これはラテン語の papyrus を語源としている。パピラスは元来エジプトのナイル河畔の自然に生育した一種のアシの名称であるが、これから製造した古代の記録材料の一種の名称でもある。

「紙とは何か」という質問に対して、現在のところ次のように定義することができる。「紙とは植物繊維を必須の原料とし、これを水中でかみ合わせ、乾燥によりその弾性を回復させると共に、繊維の粘着により形状ならびに強さをもたせた物体である。」

ところが最近水を使用しない紙の製造法が研究されているし、また合成繊維のみで紙に類似なもの、即ち第二の紙あるいは不織布と称するものが製造されているが、これらを紙の範囲に入れるべきか否かは今後の問題である。しかし原料は同一パルプであっても製造法の全く異なるセロファンは紙の範囲には入らない。

3.3 紙 の 種 類

紙とは普通「紙および板紙」を総称したもので、さらに紙は洋紙と和紙に分けられる。

紙の種類はきわめて多く、複雑で紙製造および取扱業者の専門家でも迷うものである。今後紙の造形的可能性を追求するためには、この複雑な紙の種類をも念頭に入れておく都合がよい。この詳細については、筆者が『造形ハンドブック（Ⅰ）』（造形社・1969年発行）の32～33ページにまとめた紙の分類表を参照することを記して省略したい。

3.4 紙 の 性 質

(1) 紙 の 表 裏

たいていの紙には表と裏があり、両面は多少

その状態が違っている。平面がなめらかで汚点の少ない方を表とするが、両面に印刷する印刷用紙では両面とも同じような仕上げをする。製造方法によって裏表の別ができる。

(2) 紙の縦と横

紙には縦目と横目がある。紙は縦横の方向で繊維の並び方が違っている。機械すきの場合、機械の動く方向に繊維が並び、縦と横では紙の強さが違う。

(3) 紙の変色

紙を貯蔵したり保存したりしておく、そのうちいくらか変色して黄色を帯びてくる。これは日光、熱、空気的作用によっておこるもので日光や熱がはいらないようにして、湿度の低いところに保存しておけば、あまり変色はおこらない。

(4) 紙の光沢

紙の光沢にはいろいろあるが、つぎの四種類に分けることができる。

- イ 無光沢紙（吸取紙、コットン紙）
- ロ 片面光沢紙（片艶紙）
- ハ 普通光沢紙（印刷紙）
- ニ 強光沢紙（特別用途に使う）

(5) 紙の強度

紙の強度は原料にする繊維の強さや繊維のからみあいの程度によってきまる。繊維自体の強い楮、三桮、麻、マニラ麻、亜麻などでできた紙は強度をより強くする力を持ち、パルプの中ではクラフトパルプが強靱性ではすぐれており碎木パルプは弱い。藁織はみじかくて弱い、これを亜硫酸パルプのような長い繊維と適当な割合で配合すれば、紙質をかたく引きしめて繊維組織を緻密にするため、亜硫酸パルプだけで作った紙よりも強い紙ができる。

繊維の長さは紙力と関係が深い。一般的にいつてある限度までの長さにおいては、長い繊維をもつパルプは短いものよりも引き裂強度や耐

折強度が高く、また破裂強度、引張り強度も高い。

(6) 耐久性

紙の耐久度が小さくなる原因はいろいろあるが、紙の中に酸性が残っていたり、原料の洗滌がたりなかった場合とか、不適当な染料を使った場合などである。また湿度や高温、直射日光紫外線に当たることが紙の耐久性をなくす最大の原因となる。

(7) 紙の印刷適性

印刷適性とは紙を印刷するのにちょうどいかどうかその性質をいう。印刷用紙は弾力があるてなるべく柔かいものがよいが、鮮明な印刷をするためには紙の表面がもっとも大切なので表面のきめが細かであればある程印刷に適當している。

石版印刷などは表面ができるだけなめらかなもの、凹版印刷はその必要なく、高級な凹版印刷には紙質の柔軟なのが適している。オフセット印刷では紙の表面に重きをおかなくともよい。グラビア印刷には下級紙を使い、高速度印刷にはインキの吸収性の早いものがよい。

(8) 紙の長所と短所

紙を造形的素材として用いる場合の長所と短所について考えてみたい。

紙の長所としては「手軽に使いやすい」、短所は「弱い」ということがあげられる。長所と短所を考えると面白いことに、同じことが長所にも短所にも考えられることである。「破れやすい」ことは材料として弱いということであつて、明らかに紙の短所である。しかし、これを裏返して考えてみるとこの短所は、いわば加工が容易であるという紙の長所にもつながるし、また、使った後のしまつに便利という長所にも変わる。同様に「汚れやすい」という短所は、「着色しやすい」という長所に転ずる。紙の性質にはこういうことが意外に多い。そこで短所を短所としてだけ眺めずに、逆の見方をしてみると面白い。

即ち「燃えやすい」という短所とされる性質を用いて、煙草の巻紙や懐炉灰、花火の外包紙に用いられ、燃えやすい性質を積極的に利用しているともいえる。また紙の短所と考えられている「水に弱い」という性質も、トイレットペーパーや紙おむつに用い、水に浸すと溶けて無くなるほど弱い性質が品物に利用されている。このように考えてみると一般に短所とされる性質も、ある目的あるいは一定の条件下におかれた場合に長所になりうるという紙という材料だけが示す面白さがあるのに気づく。

紙の長所と短所をあげてみると、

(長 所)	(短 所)
◦加工しやすい	◦火に弱い
◦安価	◦破れやすい
◦軽い	◦耐久力がない
◦着色しやすい	◦水に弱い
◦印刷に便利	◦汚れやすい
◦種類が豊富	◦外力に弱い
◦後処理に便利	◦変色する
◦輸送、携帯に便利	◦湿気に弱い
◦用途が広い	◦折り目がとれにくい
◦強い、丈夫	◦伸縮性がない etc
◦美しい	
◦保存しやすい etc.	

4 紙 の 技 法

紙という素材もその取扱いや理解の仕方によっては、全く新しい価値や意義を発見するものである。その意味では新たな可能性を持っている材料と考えられる。同一の紙という材料にも新境地が開拓され、新しい技法や使用法の発見はさらに次の展開に発展する可能性もある。そこで常に流動的な活気に満ちた扱いを考えていきたい。

造形教育の重要な点は、指導者である教師のもつ創造的思考力が先決であるとされる。指導の方法というものは教師のアイデアから創作されるので、創造的な指導の手段方法を探る一つ

の考え方として、材料の可能性を追求し、特質に応じた加工や構造を創案すれば、新しい形態や指導も創作されることもある。創造的な造形活動を活発にするために、材料に対処する積極的な態度、柔軟な頭、多角的な眼が指導者にも必要であり、また発展的な着想を導くためには材料の加工法を究明する意義もある。

4.1 紙 の 加 工 法

紙の加工は容易であるというだけでなく、加工方法の種類が豊富であることが特色である。新しい加工のアイデアを練り、感覚練習や構造練習、機能練習を加え、さらに変化のある創造作品が生まれるわけである。一般に行なわれている紙の加工法を紙の量と質の変化に注目して分類してみた。

(1) 紙の量を変化させない加工法

- | | |
|---------|----------|
| ① 折る | ⑫ ひっかく |
| ② 折り曲げる | ⑬ 磨く |
| ③ 折りたたむ | ⑭ プレスする |
| ④ 折り重ねる | ⑮ 凸凹をつける |
| ⑤ 曲げる | ⑯ 型付け |
| ⑥ たわめる | ⑰ 型押し |
| ⑦ まるめる | ⑱ もむ |
| ⑧ カールする | ⑲ 切込む |
| ⑨ ひねる | ⑳ こする |
| ⑩ よる | ㉑ けばだたせる |
| ⑪ 筋をつける | ㉒ ほぐす |

(2) 紙を減量する加工法

- | | |
|---------|---------|
| ① 切る | ⑧ ちぎる |
| ② 切り取る | ⑨ はがす |
| ③ 型で打抜く | ⑩ 穴をあける |
| ④ 切り曲げる | ⑪ ちぢらす |
| ⑤ 折って切る | ⑫ くだく |
| ⑥ 切って折る | ⑬ とかす |
| ⑦ 破る | |

(3) 紙を増量する加工法

- | | |
|-------------------------|----------|
| ① 貼る | ⑥ 編む, 織る |
| ② さし込む | ⑦ のぼす |
| ③ 結ぶ, つなぐ | ⑧ ふやかす |
| ④ 折り結ぶ | ⑨ 紙を巻く |
| ⑤ とじる (ホッチキス, 糸, 鳩目などで) | |

(4) 紙の質を変える加工法

- | | |
|----------------|-------|
| ① 焼く | ④ こがす |
| ② 燃やす | ⑤ 染める |
| ③ 腐蝕する (薬品などで) | |

このような多種多様の加工法の中から初歩的な折り方, 切り方, 曲げ方については幼児の指導上からも詳しく取りあげてみたい。

紙の折り方

① 薄紙を折るときには机上においた紙を手前から向う側に折り重ね, 先端をそろえてから手のひらで押えて静かに折目をつける。

② 中厚紙を折るときには内側になるところにへらや刃物の背で線をつけ, それをたよりに折り返したり, 厚紙などの場合は定規をあてて折ると正しく折れる。

③ 板厚紙等は折る外側の線のところに, 厚さの三分の一の深さの切目を入れて折ると美しい折目となる。

④ 曲線状の折目をつくるときは, 厚紙を折る外側の引張側にきれつが生じ, 内部の組織が圧力と張力によりゆるみが生じ, 組成の繊維がはがれ折り曲げの内側にしわがより, 外側にきれつの線が生ずる。そして内側には圧縮によって波うちがおこる。そのためには, 厚板紙の内側に熱や水分を与えて柔らかくして曲げるとよい。曲げる前に折目をつけたりすることは, この部分の繊維結合をゆるめて曲げやすくするのである。また刻目の印をつけ, 圧縮側の波を内側へ逃すこととなる。

⑤ 円形状の折目をつけるときにはコンパス

で円を描き, その線上をへらで注意深く刻印して, 曲げながら両手で折って円形の折面をつくる。

⑥ 折目は一度つけると塑性変形をおこして元の美しい平面にかえられないからむだな折目, 繰返した折目などをつけないことである。

紙の切り方

① はさみで紙や円形や曲線に切るときは紙を回し動かしながら切るとよい。

② 小刀で切る場合には刃面と紙面が鋭角をなし, 刃先が紙面に対して針の先で紙面をひつかくような点の状態にならないようにすることである。

③ 厚紙を裁つ時は必ず裁板を用い, よく切れる刃で, 最初は切傷をつける程度, 回を重ねて切る。定規を使用する場合には定規面に刃を固定させながら切ること。定規は金属製を使用するとよい。小刀が定規から浮いたり, 角度が変わったりすると, 定規を削ったり, 切目が曲ったりする。小刀をあまり立てて切らないで, 厚紙と小刀の刃の角度を $2,30^\circ$ にして, 手前に引くとよく切れる。

④ 紙を何枚も重ねたり, 折り重ねたりしてはさみで切る場合には, その紙を強く固定させて切らないと, 上部と下部の紙の切線がまがって, ずれてしまうことがあるから注意しなければならない。

⑤ 折り目をつけてはさみで切ると, 折り端が切目に出て, 切断面が美しくできないことがある。必ず線がきし, 折らないで切ることである。二つ折りして小刀で切りはなす場合は切目がけば立ったり, 横にそれて切れたりするから小刀の刃で手前に引くか, 先方へ押すような気持で切ると美しく切れる。

⑥ 刃先は常に鋭利であること。紙を裁断板の上に固定して小刀で切る場合には切り始めの最初から切り終わる最後まで平等の力を入れて切らないと, 最初と終りが切れないで, 真中ばかりが切れることがあり, 切目が美しくできない結果となる。

紙の曲げ方

① 薄い紙は手で曲げると簡単に曲げられ、手をはなすともとの平面にかえる。こうした変化は弾性変形といわれる。これに対して折り曲げたり、たたんだりすると折目やしわができてそれがもとの平面状にかえらないことを塑性変形といっている。

② 紙を曲げて波状曲面や円筒形を作ったりカールする場合には、曲げた紙の形をそのままの状態にしておく必要がある。即ち、紙をして弾性変形の限界をこえて塑性変形をさせ、かつ新鮮で活力のある弾性的な美しさを保たせるには次のような方法がよい。紙の上からへらまたは定規でしっかり押えて静かにしごくようにして紙を引張ると自然な曲面ができる。また紙の両端を手で持って机などの端で静かに数回こすりながら曲げるように引張ると自由な曲面ができる。

4.2 紙工作の用具

紙を用いた造形表現活動を行なうには、いろいろな用具の中から、年令に応じた使用目的に合った用具を選んで用いることが大切である。次にあげるものは一般的な用具であり、これを応用した用具を利用してもよい。

(1) 図をかく用具

- | | |
|--------------|--------|
| ① 物指（竹製・金属製） | |
| ② 三角定規 | ⑥ 分度器 |
| ③ 丁定規 | ⑦ 雲形定規 |
| ④ コンパス | ⑧ 鉛筆 |
| ⑤ デイバイダー | ⑨ 消ゴム |

(2) 切る用具

- | | |
|------------|-----------|
| ① はさみ（大、小） | ④ カミソリ |
| ② ナイフ | （片刃と両刃） |
| ③ 切出小刀 | ⑤ カッターナイフ |

⑥ 裁断器

⑦ 裁断板

(3) 折り曲げる用具

- | | |
|---------|---------|
| ① 竹べら | ④ 円錐の治具 |
| ② 鉄筆 | ⑤ 円筒の治具 |
| ③ 果物ナイフ | |

(4) 穴をあける用具

- | | |
|---------|--------|
| ① 鳩目打ち | ③ 千枚通し |
| ② 鳩目つぶし | ④ 釘 |

(5) 接着、接合の用具と材料

- | | |
|---------|---------|
| ① 水性のり | ⑥ へら |
| ② ゴム系のり | ⑦ 刷毛 |
| ③ セロテープ | ⑧ ビンセット |
| ④ ガムテープ | ⑨ クリップ |
| ⑤ ホツチキス | |

5 紙による材料体験

紙という素材は非常に豊富な造形的表現の可能性を持っているが、紙でいろいろな作品を創作し個性的な表現をするためには、まず素材である紙に自由な態度で材料体験を試みることが必要である。最初は遊びのような自由な楽しい気持ちで操作を試みてみると、幼児の場合はそこから連想されるものから作品へと発展することもあり、年令が高くなるとその経験から次の創作へと進展していく。

材料体験によって得られた経験や偶然できた形から、新鮮な感覚で素材の変化を見なおし、従来の先入観念や知識や慣習的偏見を捨て、素材に接し手をくだし、材料体験を試みてみると素材のもついろいろな新しい可能性や不思議さや未知の驚きが発見できるようになる。

5.1 紙による立体構成

材料の可能性を探る方法として、折る、曲げる、切る、破る、差す、組む、積む、接着する

けずる、くたく、割る、溶かす、塗る、練る、固めるなどいろいろある。手や道具を使って積極的に試みてみるのが重要である。

写真で示す立体構成の作品は無限の造形的可能性のある紙を用いて、加工法を限定して追求して生まれた作品である。課題を与える前に筆者が製作し例示した作品と、本学幼児教育科二年次生の本年度の作品の一部である。

紙は平面的素材であるが、折り曲げるという簡単な操作で幾何学的な折面立体となる。同じ下図の線によって折り曲げても、山折と谷折ではできる立体が異なる。その例示は写真①と写真②を見るとわかる。それぞれの写真の左右は同じ下図の線を山折と谷折を逆になるように折って作った立体である。

紙を折ると折線、折面によって屈折的立体ができる。この立体は光の投影により新しい造形的な美しさを生み出す。写真③～⑤までの立体はこのようにして創案されたものである。創造

的な造形活動にするためには、材料に対処する積極的な態度で材料体験にも取りくむことが必要である。これらの体験を生かして創造的製作や創造的指導法への発展を期待している。

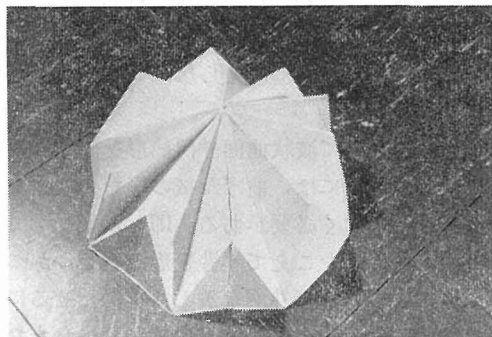


写真3 立体構成（帽子にもなる）

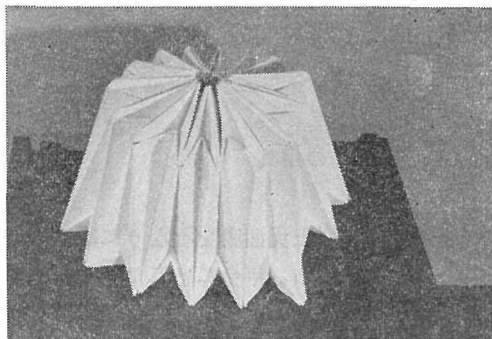


写真4 立体構成（折面体の美しさ）

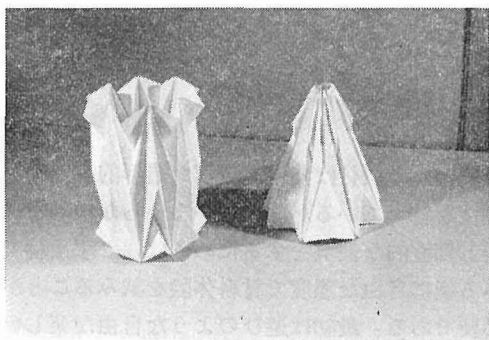


写真1 左右の立体の下図は同じであるが折り方で山と谷を逆にすると感じの異なった立体となる。

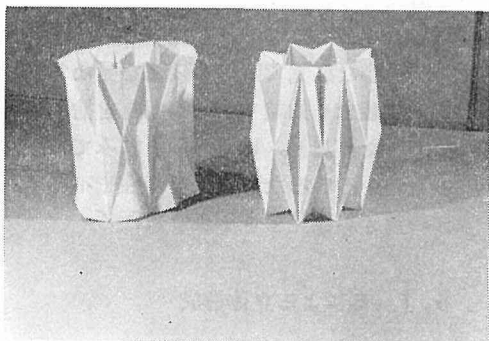


写真2 左右の立体は山折と谷折を逆に折ってみた。

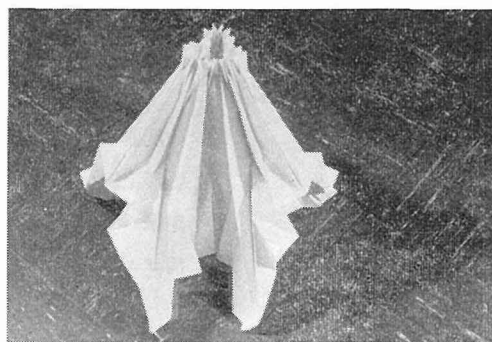


写真5 立体構成（抽象立体の美）

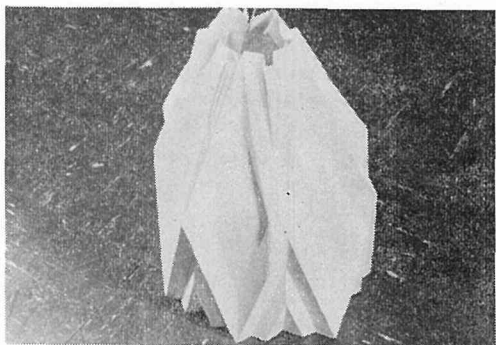


写真6 立体構成（花器にも利用できる）

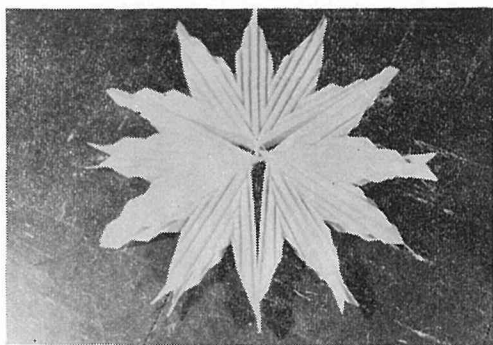


写真10 立体構成（壁面装飾 A）

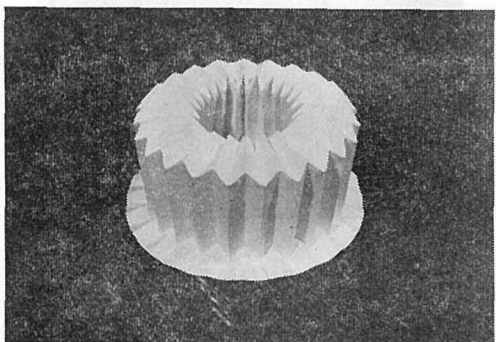


写真7 立体構成（折面立体容器）

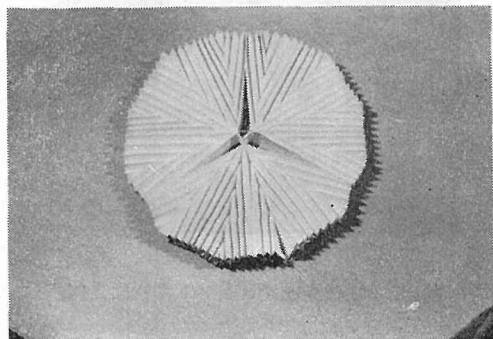


写真11 立体構成（壁面装飾 B）

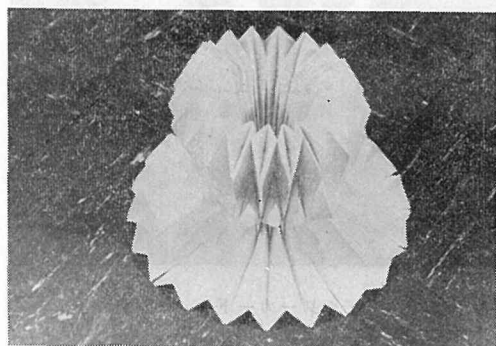


写真8 立体構成（折面構造の立体）

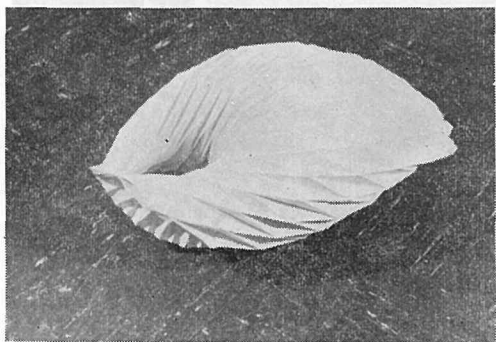


写真9 立体構成（貝を連想する立体）

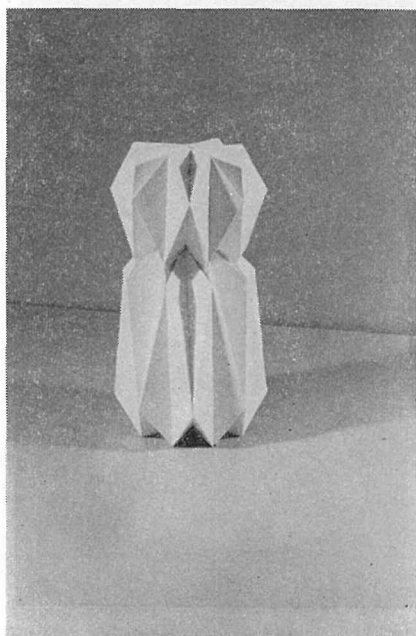


写真12 立体構成（抽象立体）



写真13 立体構成（ロケット型折面立体）

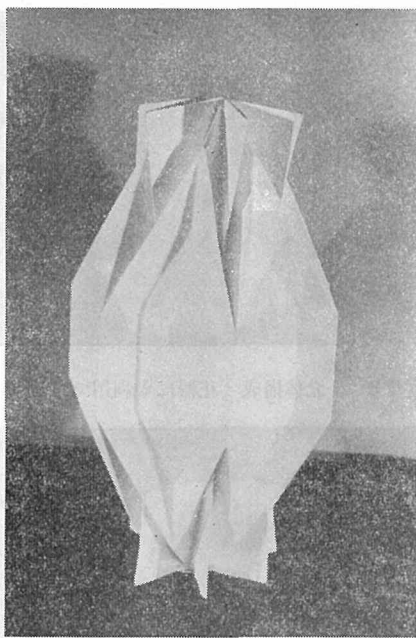


写真15 立体構成（幾何学的立体の美）

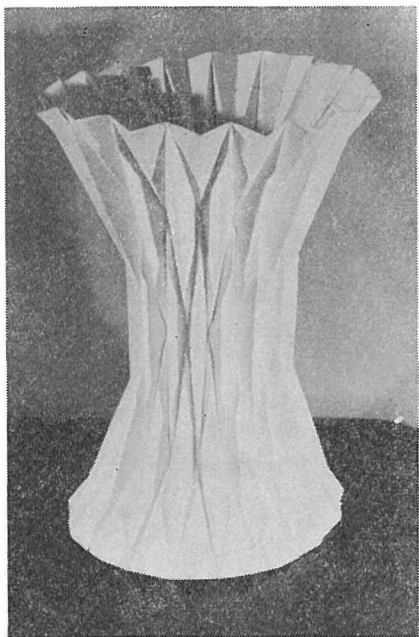


写真14 立体構成（花器にもなる）

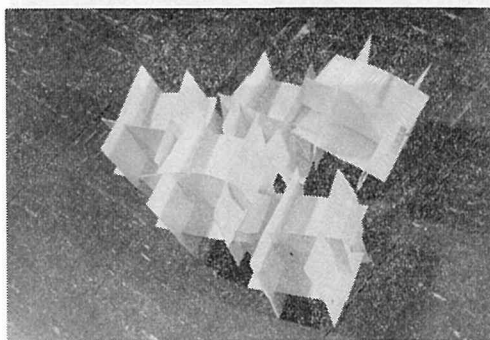


写真16 ビルダーカード
（抽象的立体へとまとめてみる）

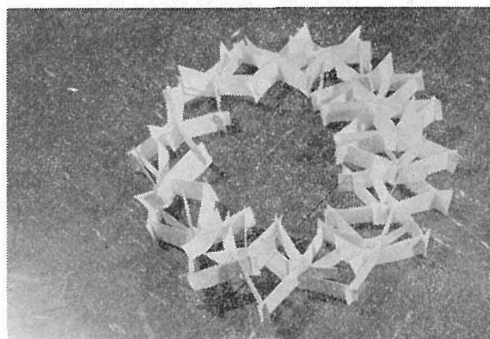


写真17 ビルダーカード（遊びから飾り物
づくりへ発展させる）

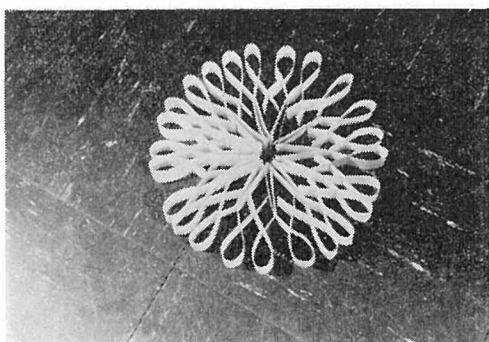


写真18 ビルダーカード（平面的な装飾は壁面にも利用できる）

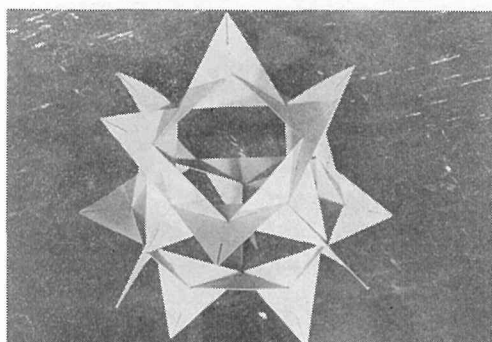


写真19 ビルダーカード
（正三角形から人工衛星）

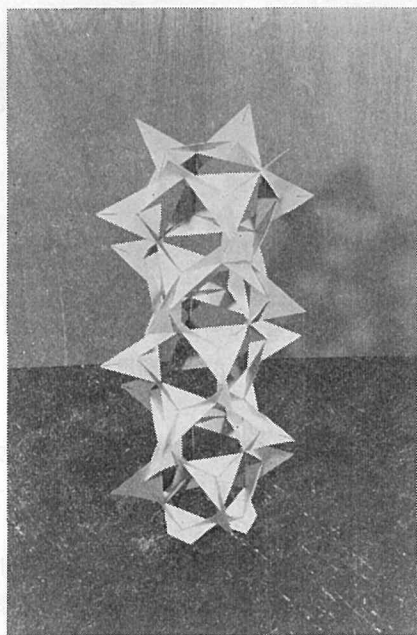


写真20 ビルダーカード
（無限の連続も可能）

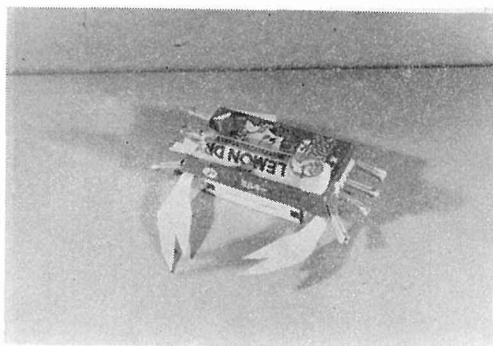


写真21 かに（空箱を使って）

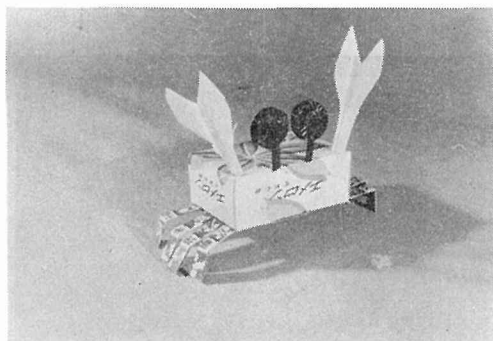


写真22 かに（かにの眼もチョコレートの包装を利用）

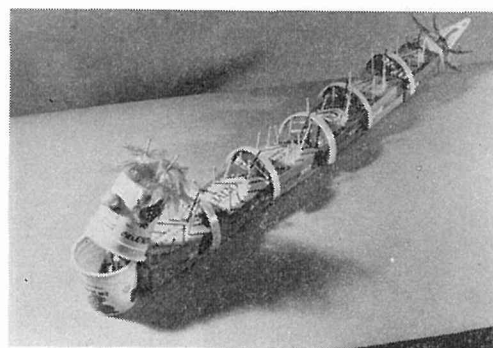


写真23 蛇（石鹼箱にマッチ棒を立てて）

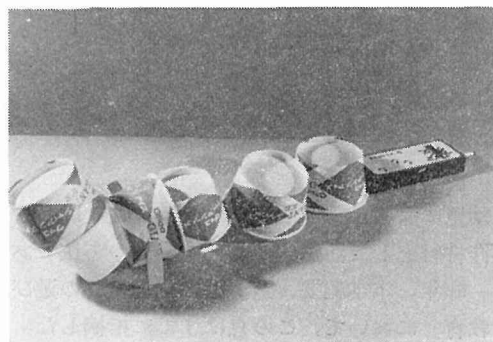


写真24 蛇（アイスクリームの空箱を連ねて）

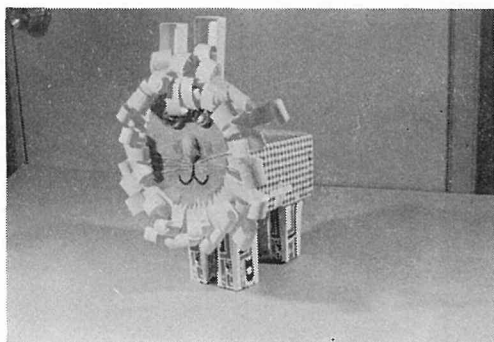


写真25 ライオン（紙をカールさせて表情を出す）

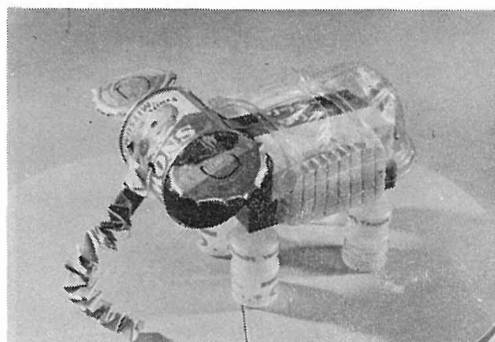


写真28 ぞう（象の鼻は紙を折りたたんで感じを出す）

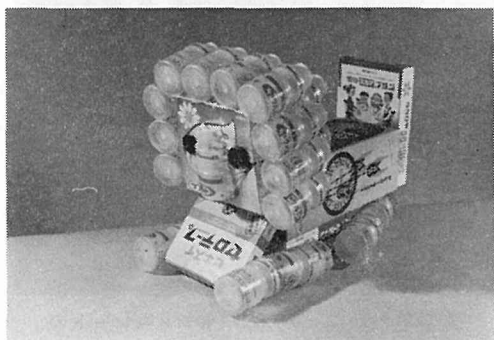


写真26 お坐りした犬
（乳酸飲料の空箱も活用する）



写真29 かめ（空箱の他に電球、貝殻も用いて）

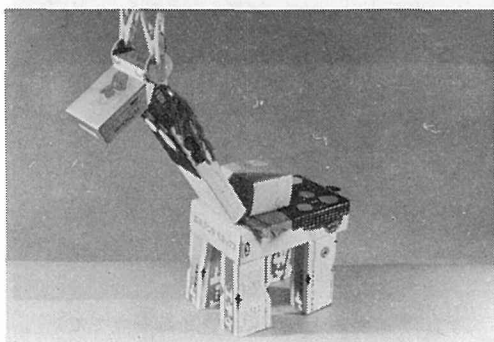


写真27 馬（足の空箱は切り込んで感じを出す）

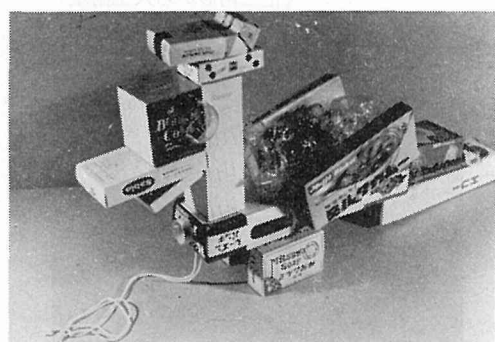


写真30 子供が好きな怪獣
（空箱を利用して）

5.2 紙製品の廃材による製作

幼児に大胆な製作活動をさせるには、廃品を製作材料として活用することも一つの方法である。昨年、本学紀要「造形活動を通しての遊びと教育」において、この点はすでに指摘した。

廃材は元来の使用目的を一度果たしているもので惜げなく使うことができる。紙製品の廃材も

いろいろあるが、写真㉑～㉓は幼児教育科の学生が、主として空箱を利用して教材研究の一つとして製作したものである。

幼児の造形表現活動を空箱を使って指導する時に、教材に合ったような空箱を選択し、整理しておく必要がある。なるべく全体的にみて安定性があり、紙質のしっかりしたもので、形や大きさの違うものを数多く用意することが望ま

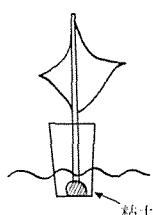
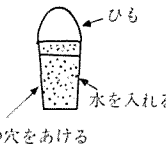
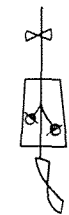
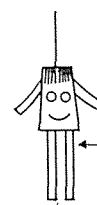
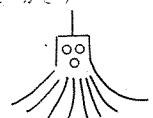
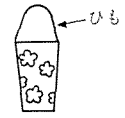
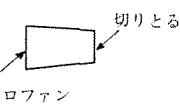
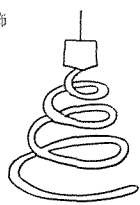
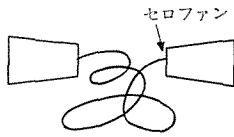
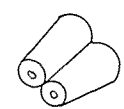
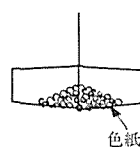
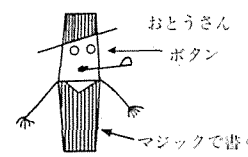
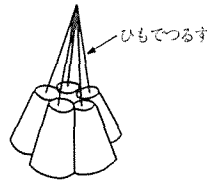
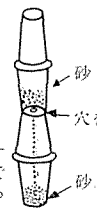
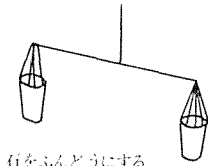
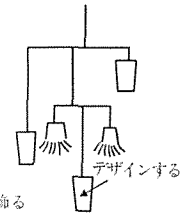
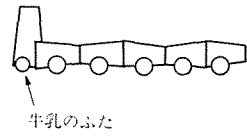
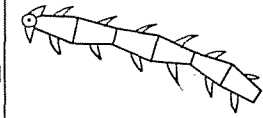
舟  粘土	ジョウロ  ひも 水を入れる 大小の穴をあける	風鈴 	人形(1)  画用紙
たこ・かざり  足はコップを切る または紙をつける	かご、金魚入れ  ひも	望遠鏡  切りとる 色セロファン	人形(2) 
室内装飾 	糸電話  セロファン	双眼鏡 	小型の鈴割り  色紙など
マイク  言語に役立てる	男性のおとうさん  ボタン マジックで書く 男性の方はのみ口を合わせる	女性のおかあさん  毛糸 女性の方は底と底を合わせる	植木鉢  絵をかく 自分で球根を入れて育てる
鉛筆立て 	鐘  ひもでつるす	砂時計  砂 穴をあける さかさにすると何回でも楽しめる	積み木の代り トーテンポール  色マジックで 絵をかく
はかり  石をふんどうにする	モビール  コップを飾る デザインする	汽車  牛乳のふた	イモ虫ゴロゴロ 

図1 紙コップを利用した造形活動作品例
(幼児のための教材として考えてみた)

しい。

空箱を利用する製作活動をねらいとしても、始めは、子どもに平面的に並べたり、積んだりする活動で十分に遊ばせることが大切である。空箱も積み木と同じ要素を持っているが、積み木以上の多様な形、大きさ、色を持っている素材である。

指導の方法にも、空箱から何かを製作する方法と、何か製作しようとする題材に必要な空箱を探して適応させる方法が考えられる。いずれにしても教師の材料体験を生かして、指導法にもよりよい方法が生まれることを願っている。

廃材の紙製品の中で紙コップを取り上げて考えてみた。幼稚園の行事や集会で利用した紙コップをきれいに洗って、製作活動に再び利用すると図1で図示したように作品の幅も広い。

このように廃材による教材も多種多様に考えられ、この他の紙製品の廃材の中にも面白い造形的可能性をもった材料があると思う。

6 結 語

幼児の発達段階をふまえて、幼児教育全般の中で幼児の造形活動の系統的指導を考察したいというねらいで、この研究を進めている。

しかし、創立六周年を過ぎた本学に付属幼稚園の設置がまだ実現しないので、幼児の実態、基礎能力調査が思うようにはかどらないことを残念に思う。

幼児が紙に親しむ経験は、新聞紙、画用紙、折り紙などいろいろあるが、これらの平面的な紙から作る活動は、まず、紙をちぎる、まるめる、さくなどから入ってゆくように感じる。そこで一枚の紙から立体を作るにも、まるめたものに耳をつけからだをつけ動物にまともっていくという指導が考えられる。

平面の紙が幼児の夢を思ふ存分生かす素材になるからといっても、紙を与えればよいというのではない。ひとつひとつの指導の段階をふんでいくことが大切で幼児の実態を知ること必要となる。造形活動の内容も多方面にわかれているが、それを一本の線のごとく、つらぬいているものを究明できないかと探りながら、さら

に幼児の実態についても調査研究を進め、資料を作成し幼児の造形教育の指導に役立てたい。

(1972. 1. 3)

参 考 文 献

- 小林七郎：「紙・パルプ」(1965)
- 村井操・中西篤：「製紙工学」(1965)
- 東洋経済新報社刊：「紙・パルプの実際知識」(1966)
- 山田貞実・伊藤清忠：「新しい紙の造形」(1968)
- 造形芸術研究会：「造形ハンドブックⅠ」(1969)
- 高山正喜久・坪内千秋：「紙」(1971)
- 朝倉直己：「紙による構成・デザイン」(1971)